

「両親の離婚危機」の認知が子どもに及ぼす影響およびその影響からの回復プロセスの検討 ―思春期の体験に焦点を当てて―

The influence of cognition of “parents’ divorce crisis” on children and recovery process from the influence : Focusing on adolescent experience

吉池 亜美 (Ami Yoshiike) 指導：菅野 純

【問題と目的】

両親の離婚は子どもにも大きな影響を与える。子どもは、離婚になったら自分はどこで誰と暮らすことになるのだろうかと不安と緊張に包まれている (平松, 2005) と指摘される一方、子どもが両親間の不和を認知する際に離婚を予期した場合の影響は明らかにされていない。本研究では、子どもが両親の離婚を予感した際に受ける影響や回復プロセスを、発達に焦点を当てて検討する。両親の離婚危機の認知とは、子どもが両親の様子を見て「離婚するかもしれない」と感じることをとする (以下、両親の離婚危機と略記)。

【研究 I】

目的 両親の離婚危機場面の内容および両親の離婚危機時に子どもに生じる心情や行動を年齢に応じて検討する。

方法 関東圏の大学に通う学生425名 (男性164名, 女性261名, 平均年齢19.61歳) に、両親の離婚危機経験を問う自記入式質問紙を配布した。自由記述式回答については、KJ法 (川喜田, 1967) を援用した分類と集約を行った。

結果と考察 幼い頃は夫婦げんかなど事象そのものに目が向きやすく、その事象を避けたり心的に距離を取ったりして自分を守ろうとする様子が見られた。10歳頃には自分や家族を対象化して見る力や強い正義感・道徳観を持つようになるため、両親に自分の考えを述べたり、げんかや離婚に抵抗を示し、仲裁しようとする行動が生じると考えられる。{先行きがわからない}など将来や自分の行動の結果の予測もこの頃より見られたが、回答数は年齢に応じて減っていた。このことから、10歳頃は「離婚」そのものや自分がどうなるのかなどの具体的なイメージが難しく、漠然とした不安を抱えるが、知識が増えるにつれて先のわからなさに対する不安が減ると解釈される。13歳頃には夫婦関係のフォローや親の愚痴を積極的に聞く行動が見られた。

【研究 II】

目的 両親の離婚危機が思春期の子どもの日常生活上の適

応に及ぼす影響、その影響からの回復プロセスを検討する。

方法 10歳から15歳に両親の離婚危機経験のある7名 (男性2名, 女性5名, 平均年齢22.43歳) に対し、半構造化式面接調査を2回 (計90分) 行った。質的データ分析法 (佐藤, 2008) を援用し、分析を行った。

結果と考察 (a) 日常生活上の適応：家庭においては親に対して適応的に振る舞う場合や、反対に家族と距離を取ろうとする場合が見られた。家庭の外では友人との深い付き合いを避ける行動や思い出さないようにする行動が見られた一方、むしろ楽しく過ごそうとする場合も見られた。頭痛や入眠困難などのストレス反応を呈する事例も見られた。(b) 回復プロセス：両親の離婚危機中、子どもは自分なりに対処しながら過ごしており、自然にあるいは偶発的事象をきっかけに夫婦関係が改善したと感ずることや、子ども自身の離婚イメージが変容すること、両親と過ごす時間が減ることによって回復に向かうことが示唆された。

【総合考察】

本研究のテーマの特徴として (i) 親からの実行の意志をともしない離婚示唆や子どもの主観的判断による離婚の予期など、「離婚」に対する親の認識とのずれによって、子どもが必ずしも抱える必要のない、あるいは必要以上の不安を抱える可能性、(ii) 共同生活の継続による両親の離婚危機や不仲体験の繰り返し、(iii) 離婚のイメージおよび離婚後の生活の想像にともしない予期不安の3点が挙げられる。これらの強度は子どもの発達や対処、その他の要因によって変容する可能性が示唆された。本研究を通して、両親の離婚を実際に経験した子どもに関する先行研究や指摘の一部と類似した結果が見られたことから、子どもは両親の離婚前に離婚の影響を受ける場合があると考えられる。

しかし、本研究は子どもの主観的体験のみを対象としており、今後は親自身の体験や、親自身の行動に対する認識とどのようなずれが生じるのかを検討する必要がある。